

クロソイ放流技術開発調査

(抄 録)

山 中 崇 裕 ・ 菊 谷 尚 久

放流適正種苗開発

1 種苗性向上技術開発

囲い網方法による中間育成と従来からの海上網生け簀方法による中間育成を実施し、アイナメ籠による追跡調査を行い、種苗性について比較検討したところ、囲い網方法による放流魚の再捕が多く、食害回避のための隠れ家行動という種苗性が付与されたものと思われた。

放流環境要因調査

1 追 跡 調 査

アイナメ籠による追跡調査を実施し、中間育成方法の違いによる放流後の移動、分散及び摂餌状況等を把握し、種苗性について検討した。

調査期間中、囲い網放流群24尾、網生け簀放流群20尾、昨年度放流魚22尾、天然魚31尾が採捕された。

2 標識方法の開発

鰓蓋骨へのビニール被膜針金の貫通と直径5mmの穴あけによる標識方法は、11ヶ月後にはそれぞれ40%と8%が標識魚として確認されたに過ぎず、両方とも標識として使えないと判断された。

3 市 場 調 査

昭和61年から平成9年までの脇野沢村漁協のクロソイ漁獲量と大戸瀬漁協のソイ類漁獲量を調査した。平成9年の前者は3,397.9kg、後者は12,182.1kgであった。

平成2年7月～平成9年6月までの放流群別累積再捕率（実数）は、脇野沢村漁協では0.38～5.78%、大戸瀬漁協では0.1～2.64%となった。

脇野沢村漁協の推定回収率を累積再捕尾数、市場観察割合などから算出したところ、推定回収率は0.6%～5.92%となった。

大型魚（平均全長23.1cm±1.4cm、1,000尾）のダーツタグによる標識放流では、放流地区の脇野沢で12尾再捕された。他地区からの再捕報告はなかった。

4 遊魚実態調査

釣人数調査、釣日誌、釣獲試験を実施した。

標識魚の遊漁者による推定釣獲尾数は、年間461尾となった。